

文 献 解 題

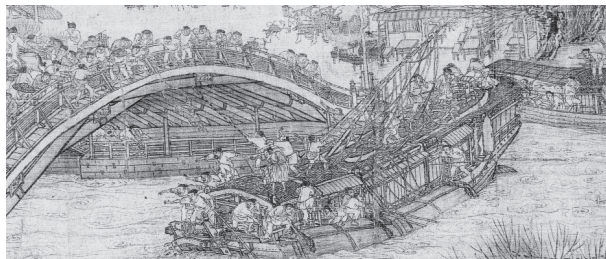
文献 『宋画全集』第1巻(8冊), 第2巻(2冊), 第3巻(2冊), 第6巻(6冊)
 編集 浙江大学中国古代書畫研究中心
 出版社 浙江大学出版社
 出版年 2008~2010年

宋画全集(全7巻)の刊行は、中国や東アジア美術の研究者や愛好家にとって一つの朗報である。本年度人文研究所に入荷したのはそのうちの4巻18冊である。宋代(960~1279)は、中国美術史における一つの極めて重要な時代で、漢・唐以降の古代絵画の集大成をなすと同時に、のちの元・明・清時代の絵画の流れを決定づけるエポックとなる時代であった。宋の皇帝には芸術、文学や文化に造詣の深い人物が多く、北宋第8代皇帝宋徽宗(1082~1135)自身も優れた作品を多く残した画家、書家であった。宋徽宗の頃、国家による「翰林图画院」の設立と科挙試験における絵画科目の導入は、当時の人々の美術への関心を高め、絵画に生涯を捧げる若い芸術家の層を育て上げ、「院体画」「文人画」「風俗画」などさまざまな流派の絵画を生み出した。宋代の絵画の特徴には、宗教(仏、道、儒)人物画の背景から独立した山水画の確立や、秀逸精緻で色彩豊かな花鳥画の誕生、市民生活を写實的に描いた社会派絵画の出現などが上げられる。

画家安野光雅氏はエッセー集『会いたかった画家』の中で宋代の張昞端(1085~1145)を取り上げたが、張昞端の代表作「清明上河図」は、宋代の市民生活をいきいきと描いた長尺の絵巻で、『宋画全集』の第1巻第2冊に収録されている。安野氏はその作品について「見るまでは死ねない」と評している。

宋画全集は、世界各国の美術館のコレクションから1500点の作品を蒐集した。この資料は、中国宋代の美術だけでなく、社会、文化、風俗、景観、交通、建築、言語、文字などの分野の研究にとっても欠かせない貴重なものと言うことができる。

張昞端作『清明上河図』(12世紀頃)局部



(文責 彭国躍)